

書評

梶 龍児 (総監修), 木村彰男 (編)

シリーズ ボツリヌス治療の実際

痙縮のボツリヌス治療—脳卒中リハビリテーションを中心に

佐伯 寛 (産業医科大学リハビリテーション医学講座)

本書は実にタイムリーな書である。2010 年 10 月にボツリヌス治療が、脳卒中患者の上肢および下肢の痙縮にも保険適応が拡大され認可されたが、その直後に発行されたからである。ボツリヌス治療は「脳卒中治療ガイドライン 2009」において、グレード A と推奨のレベルが最も高く位置づけられている痙縮治療である。海外ではすでに脳卒中の痙縮に対して積極的に使用され、その有効性が確認されている。一方、わが国では、1996 年ボツリヌス治療が眼瞼痙攣に対して初めて保険適応が認められたものの、脳卒中の痙縮に対しては保険適応が長期にわたって認められなかったという経緯がある。

本書は本分野のエキスパートが執筆している。脳卒中リハビリテーションの視点から、痙縮の病態生理、診断、治療を概観し、ボツリヌス治療を脳卒中の痙縮の治療法の一つとして、同治療の適応、メリット、デメリットに関して余すところなく述べてある。ボツリヌス治療だけでなく他の重要な治療法—薬物療法、物理療法、装具療法、フェノールブロック—

についての内容も詳述されており、ボツリヌス治療とリハビリテーションの併用の重要性が繰り返し強調されている。

当院でも多くの脳卒中片麻痺患者の痙縮治療に当たっているが、今日まで痙縮の治療には神経刺激装置を用いて、フェノールによるモーターポイントブロックを実施してきた。経験的に、フェノールブロックは、痙縮による麻痺側下肢の内反尖足に対しては著効するものの、麻痺側上肢の痙縮には効果が得られにくいという印象をもっている。ボツリヌス治療は手技が比較的簡便である、筋を選択的に治療できる、感覚障害を伴わないなどの利点があり、フェノールブロックでは困難な麻痺側上肢の痙縮の治療法として、現在、積極的に実施している。その際、本書を臨床実地のテキストとして活用させていただいて

(B5 判 111 頁 定価 4,500 円+税 診断と治療社刊 2010)

News ニュース

「ノーマライゼーション・障害者の福祉」2011 年 2 月特集目次

特集・障害と生命倫理

障害と生命倫理学 (堀田義太郎)

水面下の生と死 (花田春兆)

日本、欧米大衆文学におけるハンセン病と優生学 (田中キャサリン)

障害者運動史にみる生命 (廣野俊輔)

外国人女性として日本に生きること、そして私が生きること (山田英津子)

「中絶の権利と生まれる権利」の論争を障害児の親

の観点から捉える地平—権利論のアポリアを解く視点を探る— (麓 正博)

脳死・臓器提供に対する思い—人工呼吸器をつけて暮らす娘の父親として (永瀬哲也)

命の倫理 (長尾義明)

命を考える—死ねばいいがったのには許せない (下郡山和子)

特集を読んで (石渡和実)